ここのサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

星野由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここのサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

【Ｎコード】
Ｎ２７７１Ｙ

【作者名】
星野由羽

【あらすじ】
激小サーカス団でアルバイトをしている大学生、陽斗は、公演中にある少女と出会う。
その不思議な少女は、異世界から来た、本物の猛獣使いだった――！？
団を有名にすべく、少女と陽斗、その他もろもろが頑張ります。

1　サーカス団、公演中。

暗めのライトアップの中、スポットライトが当たる女性が、まるで宙を歩いているかのようなバランスで、一本の細いロープを渡る。
途中、ジャンプをしたり、スキップをしたり。落ちたかと思えば、九十度に折った足をロープにかけ、逆さづりでにこやかに手を振る。
会場は、観客が息をのむ音と、不思議な音楽しか聞こえない。

「団長、今日は大盛況ですね」

ステージ裏で、気の強そうな瞳の十代の男子が、近くにいた、でっぷりとしたお腹のおじさんに、うきうきとした声を出す。

「そうだな、陽斗（はると）。いつもよりはましだ」

フラフープを持って、またロープを渡ろうとする女の人を見て、おじさん――団長――が、満足げにうなづく。

「俺も、チケット売っていて気が付いたんですよ。いやー、五十人も入るなんて、何年振りですかね？」
「知らん。この公演もこれで最後だ。気を抜くんじゃないぞ」
「わかっています」

男子――陽斗――が、真剣な表情でうなづく。
最後の仕事を終わらせに行こうと、彼は歩き出した。

陽斗の仕事は、この激小サーカス団――トロイメライサーカス団――の、小道具づくりや、照明や、チケット販売など、とにかく裏方の仕事をやっている。

今は死んでしまったが、父がこのサーカス団に入っていたことや、中学、高校と演劇部で、裏方の仕事は大半わかっているということから、バイトをしているのだ。
ただ、普段は地元のあまり有名でもない大学に通う、十八歳だ。

陽人は長めの階段を登り切り、大きな照明の裏にいた。

「最後の仕事――。照明を一気に落とすことっ。これか」

ステージではそれぞれの団員の紹介が終わり、幕を下ろすところだ。
彼は、目の前にあった大きなボタンを見て、少しビビる。が、思い切り、えい、と押した。
しかし、ステージの電気だけが落ちない。

「どうなっているんだ……？」

その時、背後に気配を感じ、体ごと後ろを向く。すると、そこにいたのは――、

「ねえねえ、電気が落ちないのはあたしの使い魔のせいだってば。保護してよ。頼むからー」

真っ赤なローブを着た、十六、七の少女だった。

2　サーカス団、混乱中。

「聞いているのか？」

目を丸くし、びっくりした表情の陽斗に、ぺちぺちと軽く平手打ちを食らわす、少女。

その効果なのかわからないが、陽斗は少女の目を見て、真剣に聞く。

「迷子？」

「真剣な表情でそんなこと聞くなーっ！」

べしーん、と大きく平手打ちをされ、陽斗はしりもちをつく。

自分より下にいるのが安心したのか、少女は仁王立ちで、堂々と、自分の名前を述べた。

「あたしは、異世界から来た猛獣使い、レオーだ！」

「……」

しばらく、沈黙が続いた。

それに耐えきれなくなったのか、少女――レオー――が、陽斗の目の前で手をひらひら振る。

「おーい、どうしたー？」

「……はっ。フリーズしてた」

「おお、目が覚めたな。それじゃあ、ピカルを回収するのに、手伝ってくれ」

「……」

「どうした？　またフリーズしたぞ？　そうか、お前はそんな癖があるのか。わからないことがあったらとりあえずフリーズするのだな。ピカルとは、使い魔の名前で――」
「そんなこと聞いてねえ！　おい、お前何歳だ？　そんな年になって迷子で、しかも意味の分からないこと言っていると、いじめられるぞ」

陽人の答えが不満だったのか、レオーがぷう、と頬を膨らませる。
「本当なんだってば。もう少しでステージに落ちちゃうぞ。ピカル、宙に浮いてられるの、三分程度だから」

は？　と、陽斗が顔をしかめた、その時――。

ぽてっ。

ざわついていたステージ上に、何か、丸い発光しているものが落ちてきた。
一見電球のようだが、よく見ると小さい羽根が付いていて、目もある。音からすれば、硬くはないのだろう。
そして、上のライトがステージを照らしていたと思っていたのだが、上の大きなライトは、発光していない。
代わりに発光しているのは、落ちてきた物体だ。

「――は？」
「あーあ、ピカル、落ちちゃった。ほら、回収に行くぞ」
ひらりとローブを翻し、レオーはステージへの階段を下りて行った。

「あ、おい待てよ！」

慌てて陽斗もあとを追いかける。

その途中、チラリとステージの方を見たが、団員はみな、落ちてきた丸いものを取り囲み、触るか触らないかを検討しているところだった。観客は、ただ、ざわつくしかない。

そうこうしているうちに、意外と足が速いレオーがステージの上に到着した。

「げっ！　あいつ、何する予定だ！？」

陽人は、駆け降りるスピードを速めた。

ステージでは、胸を張ってゆっくりと歩くレオーが、丸い生物に近づいているところだ。

「おいっ！」

陽人もステージについた。今まで強く発光していた生物は、光を弱めている。

「陽斗か！？」

今、会場に光は一切ない状態だ。人の顔も認識しづらい。

「そうです。あの、少女が乱入――」

「少女じゃない。レオーだ！」

くる、と振り返り、不満そうにほっぺをふくらます少女は、例の丸い生物に手を差し伸べる。

「ピカル。ごめんね、はぐれちゃって」

ぴか、と光が強くなる。

「おーそうか。嬉しいのか。あたしも嬉しいよー」

「ちょっと待った！　お嬢ちゃん、きみ、なんなのだね！」

団長がツッコむ。

すると、うっとおしそうに団長を見ながら、レオーはさらに詳しく身分を説明した。

「レオラール・シー。国王様に言われて、異世界から送られた、十七歳の、猛獣使いだ。こいつは使い魔のピカル。光るのだけが取り柄だ」

腰に手を当て、エッヘンとでもいう風なレオーに、ステージ上の人すべてがフリーズした。

「こいつ、なんなんだ――……？」

誰かが、もっともな意見を言った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2771y/

ここのサーカス団には、異世界から来た猛獣使いがいます。

2011年11月7日09時04分発行